

ア
カ
ネ
ズ



「はぁ……はぁ……♡」

「だ、め……」

強い意志力を持って決意したはずなのに、胎の底から湧き出す熱はあかねの決意をいともたやすく融かし尽くしていた。

「んっ……♡」

溺れゆく人間が空気を求めるのにも似た、縋るような手つきで、あかねの手が、枕元に置いたスマートフォンに伸びる。

焦った手つきと震える指先は、顔認証も、パスコードの入力も一度ずつ失敗してから、ようやくロックの解除に成功した。

最新スマホの高解像度ディスプレイに表示されているのは――

ペニス
男性器だった。

酔いが覚めて、冷静になってみれば、彼が最初からそういうつもりだったことにはすぐに気付いた。

そう考えなければ不自然なくらいに、

シチュエーション
状 況がでさすぎていた。

だけど、気付いたからといって、どうすることもできない。

そうなるように誘導されていたとしても、最終的に抱かれることを求めたのはあかね自身だったし、たとえ身体が目的だったのだとわかって、彼の言葉は今のあかねにとってあまりにも甘美なものだった。そしてそれら以上に、なによりも――

たったひと晩で、あかねの身体には、
性の快感が消すことのできない烙印として完全に刻み込まれていた。

今日もまた、堅いはずの禁欲の決意は、あまりにもあっさりと融け落ちていた。



——あかねちゃんのおっぱい、柔らかいね。

彼の言葉が、頭の中に響く。何度も、何度も、

思い返して妄想 妄想 想した彼の言葉は、
本当に耳元で囁かれているかのように頭の中で反響を繰り返す。

——こうすると、あかねちゃんは気持ちいいんだよね？

——ほら、イくときはなんて言うんだっけ？

「イ、くっ……
イキ、ますっ……♡」

——次はこっちも可愛がってあげるよ。

——ほら、もうパンツなんて脱いじやいなよ。
こんないいやらしい染みまで作っちゃって。

「ひゃ、あっ、んっ……♡」

——まだ触ってもいけないのにこんなに濡らしちゃうなんて、あかねちゃんはおントにえっちな子だね。

——そんなえっちなあかねちゃんは大好きだよ。

——挿入れるよう？　良いかな？

——動くよ。

『あっ♡ あんっ♡
はあ、ああっ……♡』

——ほら、もっと声を出して。
あかねちゃんのエッチな声、聞かせて。

『あんっ♡ はっ♡ あっ♡
ふあっ、あっ——♡』

—気持ちいい？

「は、いっ♡んあっ♡
気持ち、あんっ♡
いい、れしゅっ♡」

—そろそろ射精^だすよ。

ぞくりっ、と背筋を期待感が駆けていく。
何度も、
何度も、
何度も何度も何度も何度も何度も妄^{さいげん}想を
繰り返してきた瞬間が、くる。

「はいっ♡
きて、きてくださいっ♡」

「あっ♡イクっ♡
ま、またっ♡
イキ、ますうっ—

♡」

熱いものが吐き出されて、膣内に広がっていく、
ありえるはずのない仮想の感覚で、
あかねは絶頂を迎えた。

今日一番の絶頂感に、
膨らんでいた欲求が解消されていくのを感じる。
その一方で、自分の中で、
本物を求める気持ちに増していくのを、
あかねは確かに感じていた。







